

富貴寺大堂

富貴寺は平安後期（794 年から 1185 年）、仏教徒を極楽浄土へと導く仏である阿弥陀如来像を祀るために建立されました。大堂は国宝に指定されており、九州で現存する最古の木造建築物です。富貴寺は、恐ろしい形相で門に立つ 2 体の仁王像と 2 本の大きな木 – 左が榎、右が銀杏 – に守られています。内部の仏像と同様に大堂自体が榎の木で作られており、弧を描く屋根のデザインは、仏教における神聖な生き物である鳳凰を象徴しています。元々内装は鮮やかな色で塗られており、細部まで書かれた絵が壁や柱の大部分を覆い、阿弥陀如来像は輝く金箔に包まれていました。礼拝者たちは壁高くに描かれた極楽浄土の仏に見守られながら、時計回りの方向に仏像の周りを回りました。（多くはまだかすかに目に見えます）後年、禅や茶道の影響から、より控えめで洗練された美学が日本の美術や建築に取り入れられました。富貴寺のように豪華に装飾された寺は、古くなり色褪せて、永遠性の風格を帯びていったのです。

榎の木の伝説

むかしむかし、田染のふきの谷に大きな榎の木が一本ありました。この木はとても大きく、その影は朝には川にまで及び、夕べには水田にまで達するほどでした。ある日、伝説の仏教僧である仁聞菩薩がここに霊場を開くことを決め、阿弥陀仏を祀る大堂を建てるよう命じました。しかし寺を建立するために木こりがその大きな榎の木を切り倒そうとすると、とても不思議なことが起こったのです。どれだけ切っても、次の日には木が元の状態に戻っていました。木こりは困って、どうすればいいか分からずにいました。するとある日、その木に日光を遮られていた地元の植物がこう言いました。「毎日その日の終わりに木から出てくるおがくずを燃やせば、その木を倒すことができますよ。」その助言のおかげで、木こりはついにその木を倒し、寺の建設を進めることができました。仁聞菩薩の命に従って、大きな寺と仏像が、全て 1 本の榎の木から作られました。

これが、国宝である富貴寺です。今日でも多くの人がこの地に惹かれます。今でも大きな榎の木がこの地で育っています。